

# 北の とびら

vol.123  
令和3年3月

特集

「北海道の絵画」

北海道の美術館が誇る

「今、見るべきこの1点」

アートのチカラを考える

人づくり一本木基金

「海外研修支援事業」レポート

街歩きアート

れんがとやきもの文化を誇りに、  
表現への情熱を絶やさぬまち

「江別市」

エッセイ

石川直樹

表紙作家の紹介

関根ちあみ



# 北海道の美術館が誇る “今、見るべきこの1点”

北海道には6つの道立美術館があります。  
常設展やコレクション展で展示されるのは、各館が所蔵する  
地元ゆかりの作家作品や特色あるコレクション。それらはまさに地域の宝です。  
今回、各館の所蔵作品にあらためて注目。  
北海道美術に造詣が深い札幌芸術の森美術館館長・佐藤友哉さんに、  
「一度は見るべき」という北海道の絵画作品を挙げていただきました。



岩橋英遠《彩雲》1979年（北海道立釧路芸術館 所蔵）



林竹治郎《朝の祈り》1906年（北海道立近代美術館 所蔵）

札幌南高校）へ移ります。そこで指導したのが三岸好太郎や能勢眞美など、のちに作家となる人材でした。ほかにも久保守や彫刻家の中原悌二郎など多くの教え子があります。指導者としても優れていた竹治郎は、「北海道の美術の父」と言えるでしょう。

《朝の祈り》は、北12条にあった竹治郎宅の朝の様子をモデルに描かれています。「敬虔なクリスチャンだった竹治郎は、朝夕の祈りを欠かしませんでした。この絵は実際の家族写真をもとにしていて、奥さんと子どもたち、そして下宿していた学生服の書生がいますね。しかし、写っていたはずの父である自分はいません。そして壁にはサーベルがかけられています。実は、この絵が描かれる直前の1904（明治37）年に日露戦争が始まりました。家族の日常風景を借りて、いない父親に出征した人々を重ね、その無事を祈るという二重の意味が込められているのかもしれない」。この作品は創設されたばかりの文展（文部省美術展覧会）に出品され、北海道で1点のみ入選を果たしています。

美術館は借りてきた有名作品を展示するだけの施設ではありません。札幌・函館・旭川・帯広・釧路にある6つの道立美術館では、「地域文化への貢献」という使命のもと、地元をはじめ、ゆかりの作家作品の収集を行い、常設展や企画展のテーマに合わせて公開しています。

## 近代の北海道美術のはじまり

開拓により、北海道への移住者が増加した明治時代後半。美術の指導者も北海道にやってきました。まず、佐藤さんが名を挙げるのは林竹治郎です。「東京美術学校で日本画を、画塾で油彩画を学び、札幌の北海道師範学校（現・北海道教育大学）に教師として赴任しました。しかし、すぐに札幌中学校（その後、札幌第一中学校。現・

## 伝統を覆した北の個性

著名な北海道出身の作家で、必ず名が挙がるのは岩橋英遠と片岡球子でしょう。2人とも日本画家ですが、個性的な作風で知られます。

岩橋英遠は江部乙村（現・滝川市）出身。21歳で上京し、中央画壇で頭角を現しました。英遠は日本画で前衛的な表現に取り組んだ先駆者と言えます。「ひとつの画面の中に2つの異なるモチーフを描く『ダブル・イメージ』という表現法は、英遠が始めたもの。球子もこの表現を取り入れた作品を描いており、今では日本画の手法のひとつとなっています。そして英遠は自らを道産子作家と称していました。自然を幻想的に捉えた《彩雲》は、壮大なスケールを感じる作品です。英遠は記憶の中の故郷・北海道の風景を源とし、日本画の新たな表現を追求しました」。

片岡球子は札幌出身。18歳で上京し女子美術学校（現・女子美術大学）で学びました。「大胆にデ



三岸好太郎《飛ぶ蝶》1934年（北海道立三岸好太郎美術館 所蔵）

た中国の上海や蘇州で、その風物をテーマにした作品が多く描かれました。これは、ゴーギャンに傾倒していた上野山が東洋のエキゾティシズムを前面に押し出した代表作と言えます\*。

昭和に入ると、若い作家たちによる新たな美術団体が設立されました。そのうちの独立展（独立美術協会）に関わっていたのが三岸好太郎です。三岸は前衛的でロマンティシズム溢れる作



片岡球子《面構 浮世絵師歌川国芳と浮世絵研究家鈴木重三先生》1988年（北海道立近代美術館 所蔵）

品を多く描きました。《飛ぶ蝶》などの詩的な表現は、シュールレアリスムに影響を受けたものです。そのシュールレアリスムから出発したのが、俱知安出身の小川原脩\*は、日高山脈で起きた遭難事故に題材をとった作品。その後戦争画を描きますが、どこか前衛の雰囲気を感じられます。戦後は俱知安に戻り、北海道の動物や、はるかチベットの風俗などを描きまし

た。 フォルメした作風は「ゲテモノ」などと言われましたが、球子はその強い個性を表現として磨いていきました。《面構 浮世絵師歌川国芳と浮世絵研究家鈴木重三先生》は、60歳を過ぎてからライフワークとして描いた「面構」シリーズのひとつです。江戸時代の浮世絵師と現代の研究者を同じ空間に描き、背景には浮世絵の作品を取り入れた、ダブル・イメージの傑作と言えます\*。

### 中央画壇への挑戦と前衛的な表現

作家は多くの場合、東京の美術団体による公募展に出品しステップアップしていきます。大正時代に帝展（帝国美術院展。前身は文展）が発足。作家の登竜門となります。北海道からも、上京して美術を学び、帝展に入選して中央画壇で

活躍する作家が現れ始めました。たとえば、上野山清貞は江別出身。札幌などで教員をしたあと東京で学びました。「上野山は豪放磊落な人柄で知られ、家賃代わりに絵を描くなど、無頼なところもあつたみたいですね。《室内》は、中国・蘇州への取材旅行の成果として描かれた作品です。大正末から昭和初期、画家や文人が異国趣味として注目したのが国際都市だっ



上野山清貞《室内》1928年（北海道立近代美術館 所蔵）

函館生まれ・小樽育ちの国松登は幻想的な作風で知られ、三岸に影響を受けた作家です。昭和30年代から雪や氷のモチーフに取り組み、「氷人」シリーズという一連の作品を描きました。夜更けの根室港で、流水の海にたたずむ灯台のシルエットが抱き合う恋人たちに見えた、という自身の体験がもとになっています。その後、動物を描いた《氷上のけものたち》とい

### 地域に根ざし活動した作家たち

広く北海道の地方を拠点とし、そこに美術を根付かせた作家もいます。林竹治郎の教えを受けた能勢眞美は、札幌で道展（北海道美術協会）の創立に関わりました。帯広に移住してからは《疎林初秋》など十勝の風景を描き、十勝の美術界を活性化させました。十勝にはほかに、鹿追町で農業を営みながら描き続けた神田日勝がいます。新聞紙が一面に貼られた部屋に座る男を描いた《室内風景》\*は、晩年の代表作です。

旭川の美術団体「ヌタックカム シュツペ画会」を結成した旭川出身の高橋北修は、旭川画壇の中心

# 人づくり一本木基金「海外研修支援事業」レポート

## a r t

### 北欧での学びの日々 ~パイプオルガンとの出会い~

平成28年度~30年度 海外研修支援事業 研修生

小林英里果

(旭川市出身 研修先:デンマーク、スウェーデン)

2014年の春、初めての海外旅行でデンマークに行きました。3日間ほどの滞在でしたが、洗練されたデザインの数々に魅せられ、「いつかまた北欧に戻って勉強したい」という強い思いが生まれました。その後、北欧での木工研修について調べ、デンマークの工房での研修の後、スウェーデンにある木工や陶芸、テキスタイルなどを学ぶことができる手工芸学校「カペラゴードン」に入りました。

カペラゴードンでは3年間、学校の敷地内にある寮に住み、志を同じくする仲間たちと共に、ものづくりを中心とした生活を送りました。職務経験のある生徒が多く、先生方からはもちろんですが、生徒間でも教わるものがたくさんありました。生徒同士で切磋琢磨し、アイデアを出し、技術や知識を付けていく。それは、経験したことのないまったく新しい「製作の場」でした。

1年目は、鉋や鑿で一つのスツールの製作と箱物家具の製作という、手加工を重要視したカリキュラム。2年目は椅子の製作と自由課題。3年目は「3年間の集大成プロジェクト」、もしくは「Gesail(木工職人試験)」の2択で、私はギセルを選択しました。スウェーデン滞在中、あちこちでたくさん木工を見ましたが、中でも



①木工科の同志 ②カペラゴードンの風景 ③製作した椅子 Faaborg chair ④学校の作業場で手加工中の私 ⑤3カ月かけて製作したパイプオルガン ⑥3年次に製作した課題

パイプオルガンの製作にとっても興味を持ちました。1年次の課題には、職人さんや周りの多くの人に助けられながら、小型のパイプオルガンを製作しました。最後のギセルの試験では「音の鳴る家具」をテーマにパイプオルガンのパイプを用いて製作しました。パイプオルガンという木工技術と出会い、自分の色、今後の目標を見つけることができたことが、一番の喜びです。

滞在最後の年、残り約3カ月というときに、世界的に新型コロナウイルスの感染が拡大しました。授業は通常通りでしたが、学校外は感染の危険が高いということで敷地内には関係者のみ、生徒の憩いの場であった食事の時間もランチボックス形式で配られるようになりました。そういった変化はありましたが、目的の自分なりの木工を最後まで追求することができました。ありがたく思っています。今後はこの経験を生かし、さらに自分の技術を高めていけるよう精進していきたいです。

○人づくり一本木基金

長原實氏とスチュワート・エング氏からの寄附をもとに創設した基金。「工芸美術及びものづくり等の分野」における振興発展と人材育成のため、道内在住・道内出身者を対象とした事業を実施しています。

URL: <https://www.ha1.jp/ippongi/index.html>



能勢眞美《疎林初秋》1967年(北海道立帯広美術館 所蔵)



高橋北修《路傍家族》1975年(北海道立旭川美術館 所蔵)

的役割を果たしました。ヌタツクカムシユッペとは、アイヌ語で大雪山のこと。山の風景のほか市井の人々をモチーフに描き、《路傍家族》は、脳溢血で右半身が麻痺したあと左手で描いた作品の代表作です。

函館出身の田辺三重松は、地元函館や、《雪の狩勝峠》\*のように道東など道内各地の風景を描き、風景画家としての地位を確立しました。岩内町に生まれ、漁師をしながら創作した木田金次郎も、おもに地元の風景を描いています。《秋のモイワ》\*は、佐藤さんがとくに惹かれる作品だとか。「岩の表現などに自然のリズムを感じられるのがいいですね」。

こうして佐藤さんに案内していただく、北海道には魅力的な作品がたくさんあることに気づきました。特別展で観る、全国的・世界的な名画や傑作は、もちろん素晴らしいものです。しかし地域の美術館には、その土地らしい名作がそろっています。コロナ禍で大規模な展覧会が少ない今こそ、地域の優れた美術作品をあらためて発見できる良い機会かもしれません。

\* 図版掲載のない作品は北海道立近代美術館所蔵

●佐藤友哉(さとうともよし)  
札幌芸術の森美術館長  
1952年、釧路市生まれ。北海道教育大学札幌分校卒業。1977年に北海道立近代美術館学芸員として勤務。北海道立旭川美術館学芸課長、北海道立近代美術館学芸部長、学芸副館長を経て2012年から現職。その間、北海道の作家や現代美術などに関連した数多くの展覧会を企画実施。著書に『北海道の現代美術』(共著)、『木田金次郎』、『北岡文雄』(いずれも「ミュージアム新書」)など。全国美術館会議や美術館連絡協議会の理事も務める。AICA国際美術評論家連盟会員。

### 北海道立の美術館一覧

北海道立近代美術館  
札幌市中央区北1条西17丁目 ☎ 011-644-6881  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/knb/>

北海道立三岸好太郎美術館  
札幌市中央区北2条西15丁目 ☎ 011-644-8901  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/mkb/>

北海道立函館美術館  
函館市五稜郭町37-6 ☎ 0138-56-6311  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/hbj/>

北海道立旭川美術館  
旭川市常磐公園内 ☎ 0166-25-2577  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/abj/top.htm>

北海道立帯広美術館  
帯広市緑ヶ丘2 ☎ 0155-22-6963  
<http://www.dokyo1.pref.hokkaido.lg.jp/hk/obj/290622top2.htm>

北海道立釧路芸術館  
釧路市幸町4丁目1-5 ☎ 0154-23-2381  
<http://www.kushiro-artmu.jp>



### 今年40年の名物小劇場 ドラマシアターどもIV



市民劇団「ドラマシアターども」を主宰する安念智康さん、優子さん夫婦がオーナーを務める小劇場兼喫茶店。自他の芝居や音楽、落語、人形劇などを披露できる約80席の劇場空間に加え、絵画などを発表できるギャラリーを併設。

1981年のオープン以降3度の移転を経て、2006年に築約100年の旧郵便局舎を全面改装して再スタート。

●江別市2条2丁目7番地1 ☎011-384-4011  
営業時間：10:00～19:00  
定休日：月曜 <http://dorama-domo.com/>

### アートスペース外輪船

1997年に千歳川沿いに建造された札幌軟石造りの「旧岡田倉庫」は、舟運で栄えたまちの記憶を今に伝える貴重な建物。北海道の事業を活用し、市民団体が2年間をかけてイベントスペースとして生まれ変わらせ、2005年から演奏会や展示会場として活用している。建物は2017年、江別市指定文化財に指定された。



●江別市2条1丁目 ☎011-391-2170  
(事務局、平日9:00～17:00)  
<http://gaijinsen.org/>

### 都市景観施設 (ランドマーク)



サイロ型の電話ボックスや西洋の古城をイメージしたモニュメント、教会風のバス待合所など、江別市内にはれんがを使った個性的なデザインの13の建物が点在。江別ならではの美しい都市景観づくりのため、市が建造費の一部を補助し、自治会や学校法人などが建てたもの。懐かしくて新鮮な「れんがのまち」のシンボルとして親しまれている。

●江別市都市計画課  
<https://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/site/toshikeikaku/2781.html>



現代の陶芸作品と基礎を築いた小森忍の歩みを伝える「北のやきもの展示室」。北海道のやきもの文化の“今”と“昔”に触れることができる貴重な場所だ



れんがの実物やさまざまな写真、模型などで北海道のれんがの歴史が分かる「れんが資料展示室」



親子や小学生など幅広い世代が参加する陶芸体験会は、やきもの人口のすそ野拡大に一役買っている

●江別市西野幌114番地5 ☎011-385-1004  
観覧時間：9:30～17:00 (最終入場16:30)  
休館日：月曜 (祝日の場合は翌日。その日が土・日曜の時は火曜)、  
12月29日～1月3日  
観覧料：高校生以上300円、小・中学生150円 ※企画展は別途料金  
<http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/site/ceramic/>

## れんがとやきもの文化を誇りに、表現への情熱を絶やさぬまち

明治時代かられんが生産が始まり、幌内鉄道と石狩川の舟運によって「れんがのまち」として発展してきた江別市。道内唯一のれんが製造会社があり、今でも変わらずに操業しています。また、市内には窯が多く、道内最大級の陶芸市「えべつやきもの市」が市民主体で開催されるなど、「れんがとやきもの」を中心にしたまちづくりが進められています。歴史的建造物を利用して演劇やアートを楽しむ活動も盛んで、まちの活力を生み出しています。



### 北の陶芸文化の今と昔がここに 江別市セラミックアートセンター

1994年、道内唯一の陶芸専門施設としてオープン。常設展示は2つあり、「れんが資料展示室」では、幕末から製造が本格化した道内れんがの歴史と生産技術の変遷を辿ることができます。一方、「北のやきもの展示室」では、道内作家の作品約60点を紹介。現在も活動し注目されている窯の新作を積極的に取り上げているのが特徴で、「開館時から築いてきたネットワークを生かして毎年収集し、定期的に入れ替えています」と兼平一志学芸員は話します。

「北のやきもの展示室」の一角には、1951年に江別で開窯し、北海道陶芸の基礎を築いた小森忍(1889-1962)の足跡を伝えるブースもあります。日本における釉薬研究の第一人者としても知られる小森の記念室は、全国でもここだけ。開館25周年の2019年には、小森と同時代を生きた陶芸家の作品を集めた「小森忍・河井寛次郎・濱田庄司-陶磁器研究とそれぞれの開花-」を企画し、全

国巡回するなど、地元ゆかりの陶芸家の功績に光を当て続けています。

鑑賞するだけでなく、陶芸を「創る」ことができるのも魅力です。個人・団体にレンタルできる窯と工房を備え、陶芸体験教室はリピーターも多いそう。また、市内の教育機関と連携した企画展やロビースペースでのファッションショー、演奏会など、文化交流の拠点としても親しまれています。

「身近ゆえに見過ごされがちなやきもの魅力を再認識してもらい、先人が積み重ねてきたれんがに対する思いを次世代に伝えていきたいです」と兼平一志学芸員。2024年の開館30周年に向けた特別企画も検討中です。

北海道開拓の礎となったれんがと、やきもの文化を継承・発信する取り組みは、地域の価値を再発見し、まちへの愛着を深めることにつながっています。

E B E T S U





1月30日、知床の日に予定されていた札幌でのトークイベントがコロナ禍によって中止になった。一年前からあけておいた日なのに、本番のわずか2週間前に中止になるという現実が、コロナ時代の生きにくさとやるせなさを物語っている。

長期間におよぶ壮大な計画なんてとてもじゃないが立てられないことを悟ると、目はおのずと身の回りに向かう。畑でも始めようかと思ったが、庭もない東京の家では無理。そんなとき、友人がミニズコンポストによる生ごみリサイクルに取り組んでいることを思い出した。

自分もやってみようと、オーストラリア製コンポスターを導入したのだが、巷で見かけるフトミニズではなく、コンポストに適したシマミニズを買わなければいけないことを知る。で、通販で購入したものの、出張と重なり、届いてから一週間ほど玄関に放置するという愚挙を犯した。生き物なので届いたらすぐに放出すべし。そんな注意書きを無視したがゆえに、箱を開けたら

ミニズの死骸でいっぱいだった、なんてホラーすぎる。この時点でもうやめたくなかったが、思い切って開封すると彼らはしぶとく生きていた。

リンゴやミカンの皮、野菜の切れ端を日々コンポストに投入し、ミニズたちは順調に育っている(と思う)。いつかこの堆肥で作物を栽培するのが目下の夢である。

どんなにIT化が進んでも、人類は土から育った野菜や穀類を食べなければ生きていけない。そんな当たり前のことをしみじみ考え、日々の生活に思いを巡らし始めた2021年初頭である。



石川直樹(いしかわ なおき)  
写真家

1977年東京生まれ。2011年『CORONA』(青土社)により土門拳賞。2020年『EVEREST』(CCCメディアハウス)、『まれびと』(小学館)により日本写真協会賞作家賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』(集英社)ほか多数。2020年には『アラスカで一番高い山』(福音館書店)、『富士山にのぼる』(アリス館)を出版し、写真絵本の制作にも力を入れている。

表紙作家の紹介



関根 ちあみ イラストレーター・ビジュアルアーティスト

Chiami Sekine

東京生まれ札幌育ち。札幌とニューヨークを拠点に制作中。  
金沢美術工芸大学卒業  
サンフランシスコ アカデミーオブアート ユニバーシティ修了  
サンフランシスコ スタジオギャラリー所属  
ロサンゼルス イラストレーター協会会員

ホームページ <https://1000a33.wixsite.com/chiamisekine>  
<https://chiamisekine.square.site/>  
Instagram @chiamisekine

[個展]

- 2008年 Chiami Sekine / Studio Gallery (サンフランシスコ)
- 2008年 Chiami Sekine / Nickelodeon Animation Studio Gallery (ロサンゼルス)
- 2010年 Chiami Sekine / Body Gallery (サンフランシスコ)
- 2016年 「そこここ」 / フリュウ・ギャラリー (千駄木、東京)
- 2019年 「とおくてちかい」 / フリュウ・ギャラリー (千駄木、東京)

[グループ展]

- 2007-20年 「Tiny」 / Studio Gallery (サンフランシスコ)
- 2015年 「スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル16」 (青山、東京)
- 2018年 「Art Students League」 / Phyllis Harriman Mason Gallery (ニューヨーク)

- 2018年 「KUMA Life」 / フリュウ・ギャラリー (千駄木、東京)
- 2019年 「Alphabet Soup」 / Studio Gallery (サンフランシスコ)
- 2020年 「タベモノ×ブンガク」 / フリュウ・ギャラリー (千駄木、東京) 他多数

[受賞]

- 2010年 Three by Three Illustration Directory 2010 入選
- 2008-15年 Society of Illustrators of Los Angeles competitions 第46, 47, 48, 49, 53回 入選
- 2010-15年 Creative Quarterly Competitions 第22, 23, 38回 次点
- 2019年 JRタワー アートプラネット 入選

※ 2021年秋、北海道文化財団アートスペースにて個展開催予定。



## 新進アーティスト育成事業

## 希望の大地の戯曲賞〈北海道戯曲賞〉

全国に門戸を開き、次代を担う優れた作品を発掘するとともに、道内外の作家が互いに競い合うことで、北海道における演劇創作活動の活性化を図ることを目的に設立された北海道戯曲賞。今年度は全国から164本(過去最多)の応募があり、2021年1月31日に行った最終選考会にて審査員が議論を重ねた結果、大賞は該当作品がなく、優秀賞に『夕映えの職分』(南出謙吾/大阪府)が選ばれました。

## 大賞 該当作品なし

## ◎ 優秀賞 (賞金5万円/記念楯)

## 優秀賞作品:『夕映えの職分』

作:南出 謙吾さん(大阪府)

〈受賞者プロフィール〉

1974年生まれ。石川県出身。劇作家、演出家。

大阪を拠点に「りゃんめんにゅーろん」の主筆として、脚本・演出を担う。また、東京を拠点に「らまのだ」の座付作家としても活動。稀に俳優も。「触れただけ」で、2016年度日本劇作家協会新人戯曲賞受賞。「終わってないし」で第2回北海道戯曲賞優秀賞。「らまのだ」として「青いプロペラ」にて、2018年度シアタートラムネクストジェネレーション選出。



## ◆最終審査員(五十音順)

江本 純子(毛皮族・財団、江本純子)

桑原 裕子(KAKUTA)

斎藤 歩(札幌座)

瀬戸山 美咲(ミナモザ)

長塚 圭史(阿佐ヶ谷スパイダース主筆)

※受賞作品及び審査員の選評は、北海道文化財団ホームページ<http://haf.jp/>で公開しています。

## アート選奨K基金事業

## アート選奨

北海道文化財団では磯田憲一氏からの指定寄附を基に、アート選奨K基金を創設。本道の芸術文化の振興発展にとって「敬愛」すべき役割を果たしたと認められる個人・団体にアート選奨を贈呈しています。令和2年度の受賞者は、関鎖京(ミンジンキョン)さんに決定しました。(賞金10万円/記念楯)

## 関鎖京さん

〈受賞者プロフィール〉

韓国ソウル生まれ。2000年に文化庁海外招聘研修生として来日し、2006年度東京藝術大学大学院応用音楽学専攻修了(学術博士)。2006年2月から北海道教育大学岩見沢校に在職。専門は文化政策。

文化庁「2017年度、2018年度、2019年度 諸外国の文化政策等に関する比較調査研究(韓国を担当)」を執筆するほか、日本と韓国の文化政策関連論文を多数発表。現在の主な研究テーマは「在留外国人との共生を目指した文化政策」、「日本の劇場・音楽堂等のアートマネジメント人材養成事業」、「日本音楽芸術マネジメント学会」、「日本文化政策学会」の理事を務めている。

現在は「札幌文化芸術未来会議」(委員長)、「岩見沢市総合戦略等推進委員会」(委員)を務めるほか、「札幌演劇シーズン実行委員会」、「札幌ACF(アートサロン部会)」等を通じて文化芸術や地域の実践現場にかかわっている。

2020年5月に「新型コロナウイルス感染長期化に対峙する札幌の文化芸術関係者の活動再開の道を探るアンケート調査 第1章 影響と損失」の調査を実施し、提言(実施主体)をまとめて札幌市に提出。2020年12月から上記「未来会議」で、札幌市の効果的な短期及び中長期の文化芸術施策を検討するための基礎作業に取り組んでいる。



## 人づくり一本木基金(長原實・スチウレ・エング 人づくり基金)事業

## ものづくり一本木選奨

「人づくり一本木基金」の顕彰事業として、工芸美術及びものづくり等の分野における人材育成と創造活動の振興発展のため、道内在住又は道内出身者で、その向上発展に関し功績が顕著な方々に、「長原賞/地域貢献賞/奨励賞」を贈呈しました。

## ◎ 長原賞

(賞金50万円/記念楯)

## 大門 巖さん

(東川町/木工家具職人、木工家、アトクラフト・パウ工房主宰)

旭川高等職業訓練校卒業後、木工家具職を経て、自身の工房を設立。技能五輪国際大会で第3位、旭川新人奨励賞を受賞するなど受賞多数。国内外での招待出品や講演等も行き、作品が永久展示品(パーマネントコレクション)としても収蔵されている。工房を親子で営み、天然木を活かした腕前の職人、そして遊び心のある作家として活躍している。

## ◎ 地域貢献賞〔\*令和2年度に新設〕

(賞金30万円/記念楯)

## 寺岡 和子さん

(小樽市/染織工芸家、染織アトリエKazu主宰)

女子美術大学卒業後の1960年代から、織と染めの技術を磨き、造形美術作品を国画会展、全道展、現代工芸展に出品。全道展では奨励賞を2度受賞。小樽ならではの作家活動と共に、手織教室をはじめ、北海道東海大学・小樽美術館等で愛好者や後進の指導、育成に携わる。北海道女流工芸「一の会」の設立に参加し、文化交流や工芸の振興に尽力している。

## ◎ 奨励賞

(賞金10万円/記念楯)

## 島倉 真史さん

(函館市/木工家具製造、家具職人、家具工房「くらくら」主宰)

北海道芸術デザイン専門学校卒業後、(南)インテリア北匠工房を経て、2019年に函館に移住し工房を開設。地域ブランド「新箱館家具」デザインコンペ2018で最優秀賞の受賞や、旧函館区公会堂の家具の調査と修繕に携わる。道南スギを使った針葉樹の活用に取り組んでいる。